

角松敏生

TOSHIKI KADOMATSU

来年のデビュー30周年に向けて精力的に走り続けるシンガー・ソングライター角松敏生。好評を博した前作『NOTURNS』から1年半ぶりのニュー・アルバム『Citylights Dandy』は、「海・夏」テーマに話題をよんだアルバム『Summer 4 Rhythms (2003年)』の続編と位置付けることができた。『Summer 4 Rhythms』が太陽だとすれば、『Citylights Dandy』は月。彼の音楽の持つもうひとつの代名詞である「都会・夜」をテーマにした大人のアルバムだ。80~90年代初期にあの時代が持っていた輝きや煌めきを今のセンスとテクニックで再構築し表現することで、懐古趣味に陥ることなくこんなにも時代を超えた普遍的な音楽が出来上がった。いや、それ以上に新しさを感じさせることは驚きでもある。4リズムによるハイ・クオリティなバンド・サウンドの中で核となるのは、もちろん角松敏生のギター。今回はシンガー・ソングライター、ギタリスト、プロデューサーとして並々ならぬ高いプロ意識を持って活動してきた彼に、音楽業界の現状に対する思いを語ってもらった。(文：近藤正義)

第5回 LIFE & LIVE

このコーナーで取り上げるのは長いキャリアを誇り、現在もおシーンの第一線で活躍を続けるギター界の重鎮。そのキャリアの中で培われた音楽、そしてその礎となった人生について語っていただく。

LIFE & LIVE

記録するに値するものだけが レコーディング芸術として生き残っていく

常にリアルタイムにこだわりながら活動を続け、来年で30周年を迎えますが、僕“角松敏生”というアーティスト、ミュージシャンを知らない人は結構多いと思います。知っている人は知っているが、知らない人は全く知らない。なぜこういうことになったのか...。その大きな理由は、テレビに出演しなかったからでしょうね。これは80年代の初期、最初に所属していた事務所の方針だったのが、今自分の事務所を持つようになってからもそのまま続いているという状況です。しかも僕にはシングルの大ヒット曲というものが無い。この業界、シングル・ヒットが1枚あれば10年は食べていけると言われていますが、僕の場合は逆に70年代の洋楽ロックのように音楽というものをアルバム単位で考えていたんです。要するにシングル・ヒットを放ってテレビに出演し、ビジネスにつなげるというやり方ではなかったわけです。それが良かったのか悪かったのか、よくわかりませんが... (笑)。だから僕の場合、派手に露出しなかった

分決定打に欠けるのかもしれませんが、そのおかげで昔も今も業界に轟かされることなく、こだわるべきところにはこだわりながらマイ・ペースでやってこれたんだと思います。いずれにしても音楽業界が大不況という昨今、これからどうすればよいのか...。いろんな角度から考える必要があるんじゃないでしょうか。

現在は音楽の在り方そのものが変化してしまって、作る側も受け取る側もイージーなんです。もともと音楽というものは全てが生演奏、すなわちライブでした。でもレコードというものの発明により、生演奏でなくても録音物によって音楽に接することができるようになった。素晴らしい演奏をレコードに収録し、いつでも聴ける便利な状況になったんです。この時点でレコードに収録されるのは名演として認められたものだけであり、これらはまさに芸術作品。つまり、とても厳しい世界だったわけです。だから、プロのアーティストというものは、記録するに値する作品を作らなければならなかったんで

す。そのためには音楽理論や演奏技術、さらにはセンスなど幅広く研鑽を積む必要があった。ところがツールの発達により、そういった研鑽を積みなくても音楽が作れるようになってしまった。その結果、コンピューターの台頭によってよりクリエイティブになれた反面、ミュージシャンのスキルやリスナーの感性は退化してしまったと言わざるを得ません。そして安易な音楽を聴いて育ったリスナーたちは音楽に対する接し方も安易です。そういう人たちにとっては、悲しいことに必ずしも音楽は人生に絶対必要なものではないんですね。だからCDの売り上げが落ち込んでいる一番の原因は、配信の台頭とかいった流通システムの変化という問題ではなく、世の中の全体的な“音楽離れ”です。そもそもアルバムが何百万枚も売れたという時代がおかしかった。こんな狭い国で、そんなにCDが売れるはずがないんです(笑)。CDが700万枚売れたとしても、おそらくそのうち30万枚買った人たちが本当のファンでしょうね。業界はも

CD制作の作業においては絶対に譲れないものがある

っと10万、20万、30万という市場を大切に、誠実な音楽を提供すべきだったと思います。なまじビッグ・ビジネスが絡んで業界そのものが肥大化して数字だけを追いかけたため、アーティストを育てることができなかったし、リスナーを育てることもできなかった。もっと悪いことに育てどころか、欺いてきた。そのツケがまわり、大多数の人たちにとって音楽はどうでもいいものになってしまったんでしょね。反面、熱心なリスナーの趣味趣向はますます細分化していく。そうすると音楽のマーケットも分断されます。そのまま行けばミニマムなコミュニティでしか音楽は存在しなくなるんじゃないかと心配になりますが、逆にこういう風に細分化された状態こそが本来の姿であり、そこからまた地道に始めるのもいいんじゃないかとも思います。

今はアーティストそれぞれが10万、20万のファンを大切に、その人たちとの間の世界を作っていくことが大切なのだろうと思います。そうやってやり続けることにより、何かチャンスさえあればより多くの人に聴いてもらえることもあるでしょう。それにしてもこの狭い日本でこれだけたくさんアーティストがひしめき合っているのか？というのが僕の正直な感想です。例えば、僕のやっているような音楽を聴きたいと思う人がいたとしても、これだけたくさん情報があふれている状況のなかでは多分僕のところまでたどり着かないでしょう。たどり着かせるためにはテレビのゴールデン・タイムにスポットを1週間続けるとかしくなっちゃならない。そんなことをすれば、1億円くらいすぐになくなりますよね(笑)。そんなに宣伝費をかけることはできないし...となると、この世界で生き残ることはとても難しい。幸いにも今、僕にはコアなファンの人たちがいて、その人たちを中心に活動を続けることができています。でも昔に比べれば業界全体としてCDの売り上げは落ちているし、コンサートの回数も減っています。入ってくるお金は減ってもスケールを落とすわけにはいかないのが厳しいところです。僕の場合、特にCDの制作の作業に関しては譲れないものがあります。それは記録するに値する作品を作る



足元のボードにはコンパクト・タイプのエフェクターが並び、CUSTOM AUDIO JAPAN/Smart Buffer、ROSSコンプレッサー、MXR/Phase90、ANALOG MAN/juicer (コンプレッサー)、ELECTRO HARMONIX/SMALL CLONE (コーラス)、RC/BOOSTER、KORG VP-10 (ヴォリューム・ペダル)、KORG DT-10 (チューナー) がセットされ、ラック・エフェクターも含めてCUSTOM AUDIO/MIDI AUDIO CONTROLLER RS16 1で集中的にコントロールする。

ための手間暇です。なぜなら音楽に携わる人間とはアナログな地点からスタートするものであって、機械いじりの職人ではありませんから。こんなことを言うこと自体が時代遅れなのかもしれませんが、音楽って絶対にデジタルなものではないと信じています。だから何が流行しようが左右されることなく、自分自身が最先端であるという自信をもつことが大事ですね。

いい音楽を作るためにお金がかかるのなら、なにか付加価値のある高額商品を販売するのの一つの方法です。その先駆けとして僕も9月にBlu-ray版のアルバムをリリースします。5.1chのマルチ・サラウンドでイメージ映像と最高の音質がリンクしているんです。これを楽しむためにはオーディオ・セットの前に座らなければならない。こんなことも啓蒙していこうかな...と(笑)。音楽は携帯で聴くものじゃないでしょう。さらにBlu-rayの可能性はネットにつながることで。これをキー・ディスクにして、特定のサーバーにアクセスできるようにする。つまり、Blu-rayディスクで音楽も映像も、さらにネット・コンテンツまで楽しめるようにする。そうすると、このディスクを所有していなければ話にならないわけです。海外でこの方式を既に始めた大物アーティストもいますよ。もう一度、パッケージを所有することにプライオリティーを感じていただくきっかけになれば嬉しいですね。これによって、音楽を消耗品としてではなく芸術として鑑賞する、またそんな時代になれば...と思います。

今の新しい音楽ファンは、凄腕ミュージシャンが演奏するコンサートを観るとビックリするみたいですね。最近僕のファンになってくれた方がコンサートに来て、「うわ〜っ、CDと同じ音だ!」っておっしゃってましたが、そんなことで驚かれてもねえ... (笑)。プロのアーティストでありミュージシャンなんだから、CDのサウンドを生でしっかり演奏できて当たり前じゃないですか。悲しいことに、音楽というものの捉え方が世間的にそういうレベルなんです。だからこそ、人前で演奏するのならこのくらい出来なくちゃいけないだぞ、ということを示してやりたくりますね。そのために、僕のレコーディングとライブは、ミュージシャンにお金をかけてます(笑)。



スピーカーはCUSTOM AUDIO製が3台セットされている。ギター信号はOD-100とフラクタル、2つのアンプ経路に分けられており、OD-100のDRY音はセンターへ、ラック内のエフェクターからの音は左右のスピーカーへ出力。フラクタルを通った信号も左右のスピーカーから出力される。



なぜならば、僕にとってのライブとはレコーディング作業の最終的な発表会なんです。レコーディングのリハーサル・セッションをして、CDの完成品を作り、それを同じメンバーでお客さんの前で披露する、これで一つのクールなんです。全てがつながっていて、CDリリース後にツアーをしてやっとそこでレコーディングが完結するんです。だからライブは決してその場限りのエンターテインメントのショーではありません。つまり、こうやってCDを作りました、という現場を見せる作業です。逆に言うなら、レコーディング作業とはある意味では観客のいないライブであり、試行錯誤しながらも最良のテイクを作りあげる場です。そしてCDとして完成したテイクをライブで演奏するわけですが、ライブではお客さんの反応が演奏に影響を及ぼすのでスタジオとはまた違ったものが生まれるわけです。それが、いわゆるライブの面白さというやつですね。



ラックには上からCUSTOM AUDIO AMPLIFIERS/OD-100、CUSTOM AUDIO ELECTRONICS/GUITAR VOLUME CONTROLLER CVCA-2 rev.3、CUSTOM AUDIO JAPAN/System Power Terminal AC0912T、FRACTAL AUDIO SYSTEM Axe-Fx ULTRA、t.c.electronic/TC2290、TC1210、CUSTOMAUDIO JAPAN Mixer、OD-100背面のPATCH・ボード、CUSTOM AUDIO ELECTRONICS/4?4 Audio Controllerがセットされている。

角松敏生 TOSHIKI KADOMATSU

1960年8月12日生まれ。東京都出身。1981年6月、シングル「ヨコハマ・トワイライト・タイム」、アルバム『Sea Breeze』の同時リリースでデビュー。コンスタントに良質な作品を発表し、これまでに30枚以上のアルバムをリリース。都会的雰囲気サウンド、大人のラヴ・アフェアーをテーマとする歌詞で、和製AORの第一人者となる。シンガー&ソングライターであるだけでなくギタリストとしての評価も高く、リズム・カッティング、リード・パートともにギター・サウンドへのこだわりは並大抵のものではない。これまでに2枚のインスト・アルバムも発表。またプロデューサーとしても著名で、杏里、中山美穂、中森明菜、JADOES、JIMSAKU、外道 (Gedo) VOCALANDシリーズなどの仕事で広く知られている。2011年6月にはデビュー30周年を迎え、横浜アリーナでのコンサートも決定した。

でも、「やっぱりCDよりもライブのほうがいいね」なんて分かったようなことを言う人は僕はあまり好きではないんです(笑)。「ライブは生もの」だの、「一期一会」だの気の利いた台詞はいくらでも言えますが、ライブで感動するというのは当たり前なんです。だって貴方もその場に参加しているんですから、それなりの高揚感があるのは当然でしょう。参加するからにはもっとしっかりと、それぞれの楽器のサウンドやフレーズ、それらが絡むアレンジの妙を感じとってほしい。そうでないと、僕たちとしてはやり甲斐が半減するじゃないですか。そ



普段はストラト・タイプを使うことが多いのだが、じつはアマチュアだった高校生時代からずっと気になっていたというテレキャスターのシンライン・モデル。ようやく状態の良い70年代製の代物が見つかったということもあり、一昨年に購入。フェンダー・テレキャスターでありながら、ホロー・ボディ・構造にハムバッキングPUを搭載するという特徴的なスペックから生まれる個性的なサウンドが気に入っている。

ずいぶん昔に入手したものが、現在メイン・ギターの座に昇格した古いムーン製のストラト・タイプ。久し振りに弾いてみると良い音がしたというのが、また使い始めたきっかけだそう。おそらく現在使っているシステムとの相性もいいのだろう。ピックアップはバルトリーニ製でSSHのレイアウト。1VOL、1TONE、5wayPU切替で、ミニ・スイッチはリアPUのシングル/ハム切り替え。トレモロ・ユニットはフロイド・ローズ。



インフォメーション

アルバム・リリース
8月4日、ニュー・アルバム『Citylights Dandy』発売。BVCL-117 ¥3059 (税込) Ariola Japan
9月22日、同アルバムのBlu-ray版も発売。BVXL-5 ¥6000 (税込) Ariola Japan
また、TOSHIKI KADOMATSU Performance 2009 “NO TURNS” ツアーにおける11.7NHK HALLの模様を収録したライブDVD&Blu-rayが今秋発売決定

CDをしっかりと聴き込んだうえでコンサートに来てほしい

コンサートはレコーディングの完成をみんなで祝う“収穫祭”

LIFE & LIVE

という意味で、ライブがレコーディングの発表会であるためには、まずCDありきなんです。お客さんには、CDをしっかりと聴き込んだうえでコンサートに足を運んでほしいんです。常々、僕のリスナーに対してはそういうメッセージを発信し続けてきました。だから、僕には質のいいお客さんが大勢付いているんですよ(笑)。今回のニュー・アルバム『Citylights Dandy』は言うなればR30指定?!80~90年代のシティー・ミュージックを知っている人には、たまらないサウンドのはずです。また、その時代を知らない若い人たちには新鮮で刺激的なんじゃないでしょうか。“30歳未満お断り”というのは冗談なので、背伸びして大人の世界をのぞきたい人は是非どうぞ(笑)。これから始まるツアーではニュー・アルバムの発表会をやりつつも、それ以外に昔の曲を今のスキルでリアレンジしてお聴かせします。逆に最近ファンになってくださった若い人たちからは「昔の曲を当時のアレンジそのままで聴きたい」とリクエストされる、そんな面白い現象も起こっています。

だから今は音楽から遠ざかってしまっていて、昔、角松敏生を聴いていたという人たちも、生活に埋没することなくまた聴いて欲しいですね(笑)。

こだわり

ステージ上においてメンバー全員の音を最適なミックスでモニターするためのパーソナル・ミキサー。角松敏生のイヤー・モニター専用で、操作も本人が行う。しかもイヤー・モニターは両耳ではなく片耳だけで使用するというのが彼流のこだわり。その理由は、両耳で聴いてしまうと閉ざされた仮想空間に入り込んでしまうからである。もう片耳を空けておくことによって、足元からの通常のPAモニターやお客さんの反応、背後のスピーカーから出力されている自分のギターのサウンドなどを総合的に聴き取ることができるのだそうだ。



きっかけとなったアルバム

『Aja』/ STEELY DAN 1977年作品



4リズムのミュージシャンを集めてその人たちの最大限の力を引き出し、何百時間をかけて1曲を練り上げていく。そうやってスタジオで起きるマジックをきっちり記録していくというステリー・ダンのやり方は、レコーディング芸術というものはこうやって作るものなんだという教科書です。記録するに値するものでなければ作品として残されるべきでないんです。恐ろしい



ほどの完璧主義ですね。やるからにはそういう仕事をしたいので、僕は彼らを見習って時間的にも経済的にもムダと言われることを今もやっています。しかし、お金も時間もない今の音楽業界ではそれが許されない場合が多い。まあ、彼らみたいに呼んできたミュージシャンのテイクを勝手にボツにすることは「やり過ぎじゃないか?」って思いますけどね(笑)。

『GOLD DIGGER』/ 角松敏生 1985年作品



85年に発表した、僕にとって5枚目のオリジナル・アルバムです。ブラック・コンテンポラリーのジャンルが盛んな中でちょうどヒップポップが台頭し始めた頃で、当時ニューヨークに住んでいた僕は直にその影響を受けました。それまでの自分の音楽に新たにニューヨークで得た刺激を注入し、さらなるオリジナリティーを目指した作品です。結果的にチャートの成績も良好

で、実験的な作品でありながら僕の出世作となりました。当時一部のサブ・カルチャー的なマーケットではミックスなど技術面での面白さが話題になったようだし、一方メインとなるマーケットではそういうことは関係なくアピールしたようです。今でもよくクラブ系の人たちに「このアルバムから影響を受けました」と言われることがありますですよ。

全国ツアー
9/18 (土) 仙台市民会館、9/20 (月・祭) 札幌市教育文化会館、9/25 (土) グランキューブ大阪メインホール、10/2 (土) 中京大学文化市民会館オーロラホール、10/3 (日) 神奈川県立県民ホール 大ホール、10/9 (土) 福岡市民会館、10/16 (土) 川口総合文化センター リリアホール、11/1 (月) 中野サンプラザホール、11/2 (火) 中野サンプラザホール
Total Info : 角松敏生コンサート事務局 03-5431-1617、角松敏生 Official HP <http://www.toshiaki-kadomatsu.jp/>